

三分間のドラマ

人生の最晩年になって「カラオケで歌う」という趣味を持たずに来たことを、とても残念に思うようになった。この娯楽は二、三十年前から全盛を極め、きらびやかに装った店は街中いたるところにあり、ホテルでもカラオケボックスを設けて客を誘っている。歌が好きで友人について行って彼女たちの歌うのを聴いているのは好きだ。社交ダンスに熱中していたころは、よくこじんまりしたダンスホールにいったカラオケタイムを楽しんだものだ。

流行歌といわれるもの、フォークソング、抒情歌など、戦前の古い歌などもよく記憶にある。藤山一郎の「酒は涙かため息か」や、霧島昇の「誰か故郷を想わざる」など、われながらよく知っていると感じるほどだ。「何年生まれ？」と聞かれそうだが、小学校の時に終戦を迎えた私は軍歌にも詳しい。伊藤久雄の「暁に祈る」は三番まで歌詞を知っている。それなのに私はカラオケで歌おうとしなかった。音痴ではないとおもうのだが、音程の幅が少なくて高音がでないのだ。そんなわけで私は歌ったことはないのだが、きいているだけで楽しい。

昭和、四、五十年代「アイドル歌手」と呼ばれた十代の少年少女が続出した。彼らは振付よろしく愛らしい身振り手振りで歌い、一つの時代を築いた。当時、同じ年頃の娘を持つ私は彼女たちと一緒に沢田研二や、中森明菜に夢中になった。ちなみに沢田研二のライブは二度聞きにいった。若い人たちと一緒に立ち上がって手を振ったものである。

フォークソングは、延々と単調とさえ思えるメロディでストーリーを繰り返すし、恋のテーマが圧倒的に多い演歌も、失恋の悲しみ、別れの辛さ、恋するものの苦しみの歌詞をわがことのように切なく歌う。コーラスのようにただ美しく歌い上げるだけではだめなのだ。ドラマチックに、主人公の気持ちになりきって失恋の女を演じなくては聞く人の心を打つことはできない。

往年の歌番組の名司会者が言ったことだが「演歌は三分間のドラマである」というセリフ、まさに三分の短い時間の中に織り込まれ、凝縮された人間模様がある。歌詞とメロディによって物語は劇的に紡ぎだされ、時として聞く人を、時空をこえて過去のある瞬間に呼び戻し、現在のわが身を突き動かすほどの感動を与えるのである。

いろいろなレパートリーでビックな歌手が多い。演歌の美空ひばりは没後二十数年

になるというのに、今なお歌い継がれ、メディアに取り上げられて、彼女を超える歌手はいまだに出現していないと言われている。私は自分の青春時代を中心にして流行歌に詳しいと自任しているのだが、最近の若い歌手の歌はほとんど理解できない。今年の正月に四〇代の娘と、二〇歳の孫と三人で熱海のホテルに一泊して彼女たちのカラオケに付き合ったのだが、孫の歌う歌は、はじめて聞くものばかりで若い世代には私の全く知らない世界があるのだとショックをうけた。やはり歌とは所詮時代と切り離せないものだろう。

私にとって好きな歌といえば、抒情的なもの、「桜貝の歌」とか、「忘れな草をあなたに」などをあげる。昭和三十年代のラジオ歌謡である。そこはかかないセンチメンタルな気分を誘われるし、また当時流行していたフランク永井の「有楽町で逢いましょう」や「西銀座駅前」など、銀座の情景が鮮明に浮かぶ。

しかし、衝撃的な歌は？と聞かれたら、次の四曲を挙げる。好きとか嫌いとか問う前に聴くだけである種ゾクツとするようなショックを感じる歌である。なぜか鳥肌がたち、胸をえぐられるような動揺を受ける歌である。それらの曲について触れてみたいと思う。音楽の旋律を言葉で表現するのはむずかしいし、だいいち、不可能だとお

もう。音楽は耳で聞いて理解するものであり、いかに形容詞を駆使しても文章でつたえられるものではない。それを承知で書く。あなたがまだ聞いたことがないのであれば、インターネットの[you tube]で聴いてほしい。

① 「人生は過ぎ行く」(曲名) 越路吹雪

越路吹雪について。1924年(大正13年) 東京生まれ、宝塚歌劇団の男役スターとして活躍。昭和二十一年に退団後、東宝の専属スターとして映画、演劇にも出演。その後、歌手としてフランスのシャンソンを日本語でカバー。岩谷時子の翻訳で数多くの曲を日本に紹介した。

日生劇場のリサイタルは有名である。フランスのシャンソン歌手、エデット・ピアフの生涯をドラマチックに演じて、年に二回、一か月に及ぶリサイタルを行ったが、固定した熱狂的なファンが多くてチケットの入手が困難なステージの一つと言われた。一九八〇年、胃がんのため逝去。五六歳であった。

越路吹雪のシャンソンの代表曲は「愛の賛歌」であろう。その他、「バラ色の人生」「メランコリー」など、ピアフの持ち歌を歌いつぎ、数多くのシャンソンを歌った。

まさにシャンソンの女王であった。フランスのデザイナー、二ナ・リッチとイヴ・サンローランのドレスを愛用したという彼女は、いつもシンプルなドレスを愛用して美しかった。その中に強烈な印象をのこす歌がある。「人生は過ぎ行く」である。歌詞はアドリブ的なリフレーンが多い。大体次のような歌詞である。

…人生は過ぎ行く

恋も過ぎ行く

好きよ 好き 好き (囁くように幾度も繰り返す)

おそかったのね でもいいの 好きよ うれしいわ

そばにいてくれて

ラ・ヴィ・サ・ヴァ 好きなのに どうして

好きよ いつまでいてくれる 好きよ

あの人待っているのね

愛しているのね ひどいわ

人生は過ぎ行く 恋も過ぎ行く

どうして二人の隙間を

どうして 助けて 好きよ あの人の

そんなにきれい かわいい？

若いのね 私より

私はもうだめ 言わないで 行くなんて

人生は過ぎ行く 私を残して

二人の隙間を 去りゆく 捨てないで！

「好き」という言葉と、「人生は過ぎ行く」、「ら・ヴい・サ・ヴァ」はリフレインとして何度も繰り返され、その言葉の中に強烈な思いを秘める。自分より若くてかわいい人に心変わりしていく恋人への悲しみに満ちた思慕の歌である。それを越路吹雪は迫真の演技で迫る。最後の「捨てないで！」という絶叫は彼女の魂の発露であろう。

② 夜へ急ぐ人（曲名） ちあき なおみ

ちあきなおみ、1947年（昭和22年）東京生まれ。5歳の時日劇の初舞台を踏む。

米軍キャンプ、ジャズ喫茶、キャバレーなどで歌う。一九六九年「雨に濡れた慕情」で歌手デビュー。代表曲に「喝采」「矢切の渡し」など多数。郷鋭治と結婚するが、郷は一九九二年、がんで逝去。茶毘に付されるとき、「一緒に焼いて！」と号泣したと言われている。その死別を機に一切の芸能活動を休止した。公の場に姿を現すことはほとんどなくなった。が、その後も彼女に対する評価は高まり、二〇一三年一月にNHK総合テレビ「songs」で彼女の歌が特集された。

昨年末、紅白歌合戦での美輪明宏の「ヨイトマケの歌」がちよつとした話題になった。常日頃の豪華な女装ではなくシンプルな労働者の姿で、ヨイトマケに従事していた母親を歌った心に染み入る歌である。美輪明宏に対する認識を新にした人も多いだろう。

ちあきなおみについても同様の特筆するようなことが起こった。

昭和五二年暮れ、NHK紅白歌合戦に出場した時のことである。

大晦日の夜、一家団欒でくつろぎ、紅白に聞き入っていたときに、舞台上に黒のドレスをまとったちあきなおみが登場し、うつろな目をしてロングヘアを振り乱し、発狂状態の女が絶叫するよううめき声をあげて歌うステージを観て凍り付いた。紅白の華やかな雰囲気にもぐわらない登場であった。

白組の司会をやっていた山川アウンサーが「なんとも気持ちの悪いうたですねぇ」と思わずつぶやいたほどの過激なパフォーマンスであった。作詞、作曲は友川かずき、歌詞は次のようである。

・ ・ ・ 夜へ急ぐ人

（私の中に夜がある 小さいころから私の中で

私の心を見据えてきた 暗い 暗い 夜がある）

夜へ急ぐ人がいりや その肩止める人もいる

黙って過ぎる人がいりや 笑ってみてる人もいる

かんかん照りの昼は怖い 正体表す夜も怖い

燃える恋ほど もろい恋

あたしの心の深い闇の中から

おいで おいで おいでをする人あんだ誰

（ネオンの海に目を凝らしていたら

波間にうごめく影があった 小舟のようにあっけない

それらの影は やがて悲しい女の群れと重なり

無数の故郷という涙をはらんで逝った)

にぎやかな夜の街で かなわぬ夢の影いくつ

勇気で終る恋もありや 臆病で始まる恋もある

カンカン照りの昼は怖い 正体あらわす夜も怖い

燃える恋ほどもろい恋

あたしの心の暗い闇の中から

おいで おいで おいでをする人あんだ誰

歌詞を見る限りではそれほど過激ではないのだが、それを演じるちあきなおみの鬼気せまるゼスチャアが強烈なのだ。「暗い闇の中から おいでおいでをする人あんだ誰」とすごい形相で手招きをする。そうして顔をゆがめて意味不明の絶叫。なごやかな大晦日の夜にこの歌はあまりにも突飛であった。アナウンサーの山川静夫の感想は、紅白の司会者として言うてはいけないセリフのように思えるが、アドリブなのか、リハーサルもやっていると思うのだが、本番のパフォーマンスも聴衆のリアクションも予想を超えるものであった。

そのせいかどうかはわからないが、それまで連続八年紅白に出場していたのだが翌年から彼女の姿を紅白の舞台で見ることがはなかった。この曲をカバーできる人はあまりいないのではとおもう。まさにちあきなおみあつての演歌である。「夜へ急ぐ」とはどういうことか、おいでをする相手は誰か、狂気の女はあの世へとリスナーを導こうとする。

③ 「ナラタージュ」(曲名) 梓みちよ

真っ白のガウン風のドレスとまとい 赤いワイングラスを持ち、すねたような歩き方で登場する梓みちよ。青いアイシヤドウで隈どられた挑発的な目。濡れたようなシヨウトヘアが顔に乱れる。セクシャルなオーラ。そうして低い声で囁くように歌いだす。

作曲は筒美京平、阿木燿子の歌詞はまことに一片のロマンをみるようで泣かせる。歌詞は長いが引用する。

・ ・ ・ ナラタージュ

おいおい話すけど出生の秘密は複雑で

上の兄貴と下の兄貴が みんな父親が違って

ママは女手一つで育てたわ

三つの時には母親の口紅盗んで化粧をしたの

「ママと私とどっちがきれい？」頬を抓られ、
叱られたけど

小学校ではよく目立ち、学芸会では主役もやった

ママは一度も来なかつたけど、舞台衣装が似合っていた

中学時代の初恋は スポーツクラブの上級生ね

背中をそっと抱きしめられる そのことばかり

思っていたの

お酒のついでで、ごめんなさいね

もう少しだけ聞いてくださる

退学通知の学校に私のほうも未練はないわ

ママはそのときあきらめ顔で、仕方がないと横を
向いていた

愛する男が出来たとき子供が欲しいと本気で思う。

彼と二人で訪ねてみたら ママは無言で泣いていた

別れる嫌だと絡み合い、男はワイシャツ真っ赤に染めた後
冷たくなった ママもそのころ死んでいた

いよいよ話すけど 出生の秘密は複雑で

上の兄貴と下の兄貴がみんな男の子だったから

ママは女の子が そう 欲しかった

ママをとつても愛していたから

ママにとつても愛されたかった……

あなたはいまのいままで

私を女の子だと思っていたの

ママ アイラブユー ソー

何度か繰り返される「ママ アイラブユー ソー」と高らかに歌い上げるリフレイン。クライマックス、「今の今まで私を女の子だと思っていた？」で高笑い、ワインをボトルごと胸をめがけて振りかける。ドレスは瞬く間に真っ赤に染まっていくーまるで鮮血のように。

阿木燿子はすごい歌を作詞したものだと感じる。梓みちよの表現力を得てこの歌は完成した。マニッシュなメーク、「女の半世紀」いや、いかなればゲイの半世なのだ。

父親の違う二人の男の子を持っていたから、三人目は女の子が欲しかったという、愛するママのために、三人目のぼくは女の子になろうとした「ニューハーフの半世紀」それを綿々とうたいあげる彼女の力量に感服した。

④ 「暗い日曜日」 ダミア

第一次世界大戦によって、戦場と化したヨーロッパは荒廃し、若者は生きる希望を失っていた。ナチスドツによる軍事侵攻がせまるなか、明日の見えない世の中であった。一九三三年、ハンガリー人ラーズロー作詞、レジエー作曲による「暗い日曜日」のレコードが

発売されるや、またたく間にヨーロッパに浸透していった。さらにフランスのシャンソン歌手ダミアが歌って、世界的に有名な曲になった。

陰鬱なメロディと歌詞に触発されて絶望した人たちの共感を呼び、自殺者が続出した。作曲家自身も自殺をしたという。やがて「自殺ソング」とまで呼ばれるようになり、各国で発売禁止になっていく。日本でも「厭世ムードを助長する」として一九三三年発売禁止になったという。この年三原山で、年間千人ほどの自殺者がでたというから、曲を別にしても人々はあの時代の重くらしい雰囲気絶望していたのだろう。

戦前の日本では、淡谷のり子が日本風にアレンジした歌詞で歌っていたようである。戦後は美輪明宏、越路吹雪、岸洋子、金子由香里など多くのシャンソン歌手がカバーした。

二〇〇二年 日比谷シャンテ・シネで、ドイツ、ハンガリー合作映画「暗い日曜日」が上映され（ロルフ・シュベール監督）観に行った。主人公は暗い日曜日の作曲者レジエーで、ラブ・ストーリーが絡んでいたが、ヨーロッパの宝石と言われるブダペストの街並みの美しさ、ナチス台頭の暗い影、ホロコーストの悲劇なども織り交じって、バックに流れる暗い日曜日のメロディがなんとも切ない効果をもたらし、この曲は私にとって最高の「忘れがたい歌」であった。

「暗い日曜日」は小学生のころからよく聞いていた。上の兄や姉とは一〇歳近く年が離れていた。六歳年長の次姉は私にとって一番親しい存在であったが、二十八歳で逝去した。終戦直後の混乱期、私の住む小都市にもアメリカ兵が進駐してきていた。姉が英語を習っていた交際相手のアメリカ人は軍服ではなく、背広姿の人であり、どのような任務で日本に来ていたのか、もう知るすべもないのだが、姉の話題は我が家ではタブーなのだ。

昭和二十五、六年当時、偏見に満ちた田舎の小都市での、アメリカ人との恋愛は実るはずもなかった。姉はつくり酒屋に嫁いだが、何度も家出を繰り返し、自らの体を苛むように、脳を病んで亡くなった。

私も、二十歳を過ぎていたのだから姉の手助けができたはずなのに、何もしなかった。姉と私は当時流行したボックススタイルの「電蓄」と言われたスピーカーで淡谷のり子の歌う「暗い日曜日」を繰り返し、聞いた。

歌に人を殺すような力があるのだろうか。落ち込んでいるとき、断崖の果てに背中を押すような力、歌の魔力。それに魅せられて自らの命を絶つという瞬間の悦楽はどのようなものであるか。

次の歌詞は直訳ではない。歌い手によってそれぞれの訳の違いはあるようで、これは私

がいつも聞いて親しんだ淡谷のり子の「暗い日曜日」である。

・ ・ ・ 暗い日曜日

忍び泣くは誰が影ぞ 星は寒く窓に流れ

君が涙胸を打つ 今宵一人待てどむなし

月無きに影は失せ

君は永遠に帰りこず ああ永遠に

君がために我は泣けり

窓に伏して 哀れ今日も

過ぎし夢を嘆き泣く

恋も幸も消えてむなし

微笑みて我も行かん

はるか遠き君が道

ソングル・デ・モンシユ（暗い日曜日）

(二〇一四年 六月)